

● 巻頭言

大学を取り巻く“グローバル”

中京大学大学院 情報科学研究科長
長谷川 純一



最近、日本の大学を“グローバル”と言う言葉が取り巻いている。一つは、「グローバル化」。グローバル化の指標は、留学生の派遣数・受入数、外国籍教員数、英語による授業数、海外提携校数などであり、文科省は大学の価値をこのグローバル化の程度で決めようとしている。もう一つは、「グローバル(G)型」と「ローカル(L)型」。端的に言えば、G型は学術的教育、L型は実践的教育を推進する大学を意味し、文科省は大学をこの2つの型のどちらかに分類しようとしている。これは、「研究大学」と「教育大学」の分類問題に置き換えられる場合も多い。そして、どちらの“グローバル”も、その評価結果が助成金の配分額や大学の序列化、ひいては大学の淘汰にまでつながる可能性がある。

では、例えばL型に分類された大学の教員は一切研究活動ができなくなるのであろうか？私はそうは思わない。この分類を提案した有識者会議の答申によれば、その趣旨は各大学が学生の実情に合わせた教育内容・教育方法を選択することであり、G型とL型の違いが大学人たる教員個人の研究教育への生きざままで左右することはない。私はつねづね大学教育の原点は研究にあると考えている。研究あってこそ質の高い教育が可能となる。とくに、大学院修士教育においては、研究の大切さと面白さを知り、かつ、実践力と社会常識を兼ね備えた専門技術者を育てることが肝要である。

中京大学が設置されている愛知県は、自動車、工作機械、航空機等に代表される製造業の一大集積地であり、大学には従来から、その産業を支えることのできる学生の輩出が求められてきた。本学でも、このような社会的要請に応えるべく、2006年に情報科学部を情報理工学部へ、さらに2013年にはそれを工学部へと改組した。そして、2017年4月には、いよいよ工学研究科修士課程がスタートし、「情報技術」と「ものづくり技術」が連携した6年一貫の工学教育体制ができ上がる。

産業技術が成熟期を迎えつつあるいま、大学には成熟した技術を複合化し、さらに高度な技術へとつなげることのできる人材の育成が求められている。G型かL型かの議論は別にして、本学の学生たちには、これまで以上に研究に裏打ちされた質の高い教育とともに、実社会で渡り合える表現力と対話力を身に付けさせる必要がある。そのためには、工学部、工学研究科、人工知能高等研究所のさらなる連携協力が必要であらう。そして、それを支えるものは教員一人ひとりの研究教育に対する情熱そのものであると信じている。